ほろ酔いインタビュー●佐佐木幸綱交遊録●

〈第21回〉小紋潤さん　一九八八年（昭和63年）〜

高橋三千綱氏のこと、小紋さんの半生、編集実務部を作る、小紋さんと辰巳さんの結婚、小紋さんのプロデュース、信綱の弟子だった前川佐美雄さん、一緒に風呂に入った人

佐佐木幸綱＋黒岩剛仁・加古陽・奥田亡羊・森部信次・高山邦男＋佐佐木朋子

2023・5・3　於・佐佐木邸

記録作成＝吉田瞳

▽始める前に

高山　今日は「氷頭（ひず）」の話からです。

奥田　獲れる量が少ないので高いんだそうです。

黒岩　鮭の頭部の軟骨を酢締めにしているそうです。

幸綱　なぜ、「氷」がつくのか。

奥田　切った感じが氷みたいに見えますものね。

黒岩　ああ、「鮭の鼻先の軟骨部分で、氷のように透き通っていることからこういうふうに呼ばれている」とか。やっぱり氷のように透き通っているから「氷」の字がつくんだ。

奥田　どの地方の食べ物なんですか。

黒岩　まあ、新潟とか寒冷地で。

幸綱　俺はずいぶん昔から食ってるよ。好きだから、酒のつまみで月に一、二回、食ってるよ。

黒岩　僕は人生初ですけどねえ（笑）。

森部　僕も初です。海鼠の薄切りかと思いました。

高山　皆さん、人生初ですね。

幸綱　この年になって「初」なんて、大変なことだよ。

黒岩　そう。コリコリとした食感は一度食べたら病みつきになること請け合いだ、と。

幸綱　なるほど。みな、これから毎日食ったらどうかな（笑）。

高山　いや。高価なものみたいだから、毎日は難しいんじゃないですか（笑）。
幸綱　高価じゃないよ。これだけで五百円くらい。ただ、スーパーなんかでは売ってない。ちゃんとした、そこで下ろしたりしている魚屋さんでないとね。魚屋は自分の店で作ってるんだと思うよ。
高山　先生これ、どなたからいただいた物ですか。
幸綱　買って来るんだよ。
高山　朋子さん、どこで？

朋子　髙島屋（デパート）の魚屋。
黒岩　そうか。じゃ、今日は買って帰るから、ちょっと早く終ろう（笑）。岩手県でもあるらしい。
幸綱　ふつう捨てちゃう鼻先の分をとっておいて、洗って、スライスして、酢につける。手間がかかるよ。
黒岩　通販もあるみたいです。
幸綱　値段は原料代じゃなくて、ほとんど手間賃だよ、たぶん。
高山　これは本当に絶品です。
黒岩　じゃ、そろそろ始めようか。

▽高橋三千綱氏のこと

高山　コロナ・ウイルスなど、いろいろあったりして、間が空きましたが、久しぶりにメンバーが集まって「ほろ酔いインタビュー」ができることになりました。今回のメンバーはいつもの黒岩剛仁さん、加古陽さん、奥田亡羊さん、私に、新しく森部信次さんに来ていただきました。テープ起こしはいつものように吉田瞳さん。いつものように大口さんと谷岡亜紀さんの年表を参考に一九九〇年、九一年くらいの話をしていただくことで始めさせていただきます。

まず、初めて来ていただいた森部さんの話から。先生と森部さんのなれそめみたいなことから話していただこうと思います。

森部　一九七三年の四月、早稲田の第二文学部の二年時に『万葉集』の講義を受けました。当時、僕らは小説・詩が中心のガリ版刷りの同人誌を作っていたので、先生にも三十円で押し売りしました（笑）。先生は次の授業までに読んでくださり、授業が終わると「じゃ、飲みながら話そう」というかたちで、源兵衛とか清瀧とかでお話を伺うようになりました。
幸綱　雑誌三十円とか、時代がわかるよな（笑）。君たちの仲間に高橋三千綱君もいたよね。

森部　はい、同じクラスでした。彼は同人ではなかったのですが、「幸綱と三千綱、綱つながりですね」などと調子のいいことを言って加わっていました（笑）。

　高橋は、三年時の七四年春に「退屈しのぎ」で群像新人文学賞をとりました。じゃ、お祝いしようということで、早稲田通り沿いのニュー浅草の二階で…。

黒岩　あそこ、よく行ったよね。

幸綱　安〜いところだ。

高山　確かに安かったけど、まずかった。干からびたしめ鯖やゴムのようなホッケ焼き、今では考えられない。

森部　その席で、先生と高橋が隅っこの方で話しこんでいる。「君の作品は純な部分と俗な部分が混在している。これを峻別しないといけない」と。それを僕らは正座して聞いて、いや、正座はしてなかった（笑）。

　河出書房の「文藝」元編集長は、こういう具合に駆け出しの作家に話すんだと思ったことを鮮明に覚えています。

　その後、高橋三千綱は、「純と俗の峻別」を実践し、七八年に『九月の空』で芥川賞を受賞しました。「俗」な部分は、ゴルフ漫画の原作などで書き分けていました。高橋は、二一年夏に亡くなりました。

幸綱　高橋三千綱君とは、その後、宇宙飛行士の毛利衛さんが主催する「宇宙の日」の作品募集の審査で一緒になった。

　とにかく、早稲田で仕事を始めた当時は、小説を書きたい学生がいっぱい来たね。ちょうど俺は「早稲田文学」の編集をやっていたので、森部君も「早稲田文学」に小説が載ったよね。

森部　先生のご指導で、早稲田キャンパス文芸賞に入選し、「早稲田文学」には七四年八月と十二月に二回載せていただきました。しかし、全く芽が出ず今日に至るわけです。

　長々と私事の話ですみません。今回は、小紋潤さんのお話ですね。僕は、七六年の正月に、学生仲間の尾上宏君（「心の花」会員白馬在住）と先生のお宅に伺った際に、小紋さんとお会いしたようなんです。尾上は、先生が最初に卒論指導をされた学生で、確か「吉本隆明論」でした。

幸綱　あの頃、吉本隆明さん学生に大人気で、はやっていたよね。

森部　僕の卒論は大江健三郎でしたが、非常勤の幸綱先生に主査をお願いできるとは思いませんでした。だから、尾上から卒論の話を聞いて、大江の問題作「狩猟で暮したわれらの先祖」（『われらの狂気を生き延

びる道を教えよ』所収）を担当した幸綱先生にお願いするんだったと悔しくて…。

そんな関係で、尾上と僕を正月に招いていただいたと思います。

幸綱　当時は跡見にも行ってたし、学生に正月に飲みに来てもらってたんだ。

黒岩　僕らも伺いましたから。

幸綱　跡見の学生が来るもので、早稲田の男がふわーッとして。

黒岩　着物を着ていて、可愛い（笑）。歌留多をやったりしてね。

森部　しかし、僕は美味しいお節料理と先生のお母様の美しさに心を奪われてしまって、何も覚えていないんです（笑）。

それで、ここに来る前に尾上に聞いてみると、その席に小紋さんと晋樹隆彦さんがいて、角川の冨士田元彦さんがいらした。皆で『夏の鏡』のゲラを見ていたそうです。僕は全く記憶にないのですが（笑）。

▽小紋さんの半生

高山　そういったことで、そろそろ小紋さんの話に行きますか。まず、先生からお願いします。

幸綱　うーん、どこから話していいのか……。小紋君の半生は「心の花」に深くかかわって、人生で出会った人の中で非常に濃厚に付き合った人だという思いがありますね。彼の、いろいろ選択する一生があったんだろうけれど、「心の花」とか「短歌」とか、そういうものに引っ張り込んだというか、影響を与えたみたいなことがあって……、責任も感じているし、「ああ」という感慨を今も、持ってるよね。

彼は、カソリックの学校に通ってて、将来、神父さんになろうと思ってたらしい。実際に、そういう学校に行ってたんだよね。それが、どういうわけか……。

黒岩　その後、長崎造船大に移って、その後が早稲田。

幸綱　早稲田の学生として来たのかなあ、うちに。この辺、最初の出会いがどういう理由だったのかがよくわからないんだ。

あとで聞いた話だけど、長崎で、バンドでベースを弾いていたというんだよね。見ると、カッコいい男子だし、文学をやる人とは全く違う空気の人だった。彼はわりと内気なところがあるじゃないか。最初会ったときは一言もしゃべらなかったような気がするよ。

高山　冨士田元彦さんが中井英夫さんと何かあった時のことを書いていらっしゃったでしょ。中井さんに「お前は偉くないだろう」塚本とか岡井さんが偉いのであって「お前なんか偉くない…」と悪態をついたら、中井さんに叱られて泣いて帰ったと、冨士田さんの文章に書いてあったと記憶しています。

幸綱　その辺のじっさいは及川君に聞かないとわからない。最初は、及川君に紹介されたような気がする。

黒岩　及川さんから「小島義明君という人だ」と紹介されたので、僕は小島さんだと思ってた。だから、最初に編集の手伝いに来たとき、及川さん、小紋さんたちに飲み

につれていかれて、そこの場で、「黒岩、『心の花』の歌人でどういうやつを知ってる？」という話になって、佐佐木幸綱先生とか、伊藤一彦さんとか…、「肝心な奴を忘れているよ。小紋潤というのを知らないのか」と（笑）。僕は、この人が小紋さんだと思ってないから、「小紋さん？　知りませんねえ」と言ったら、「お前、ダメだなあ。小紋潤といういい歌人がいるんだよ」とか言われて…。

高山　そういう、ちょっととぼけたところがある面白い人だったけど、ものすごく一本気なところもある人でした。

幸綱　なんで小紋潤というペンネームをつけたの？　最初から小紋潤だったね。

高山　誰も知らないんじゃない？誰か知っていますか。

黒岩　わかんないですね。

高山　カッコいい名前だとは思っていたのでは。黒岩のタケヨシみたいに…。

黒岩　いやいや、それはいいんだが。コモン・センスのコモンから来ているのかな。

幸綱　全然わからない。及川君も知らないんじゃないかなあ。

高山　ただ、あまりコジマは好きじゃなかったみたい。

黒岩　あ、それはあるかもね。兄弟が多くて、弟さんとかのほうが地元でしかるべき地位についていたので、自分は小島じゃないという気持ちがあったかもしれないね。

高山　それに、神学校に行ってた話とかを聞くと殴られたりして、とにかく、いやだったんじゃないかな、昔の話は。学生運動時代の話もあまり好きじゃなかったみたいで、言ってみれば「過去に傷を持つ男」みたいな（笑）、そういう雰囲気がありました。

黒岩　小紋さんは長男で、弟が優秀なんだ。

高山　いや、確か長男ではなくて、お兄さんが今もいるはずで、お会いしたことがあるけれど確かに立派な人ですよ。

幸綱　最後、いろいろな思いがありつつ、長崎に帰ったんだろう。具体的なことは聞いていないが。

高山　あと、面倒見のいい人だったということを言っておくべきじゃないかな。俵万智さんが学生の時、先生に「歌を見て欲しい」と言いに来たときに、先生は忙しいから、小紋という人がいるということで、小紋さんが最初は見ていたという話を聞いたことがあるんですが、本当ですか。

黒岩　歌集を出すときもお世話になったと。

▽編集実務部を作る

黒岩　小紋さんが「心の花」にしてくれたことで、最大によかったことは何かと言うと、編集実務という役割を作ったことだろう。

その頃、僕が入った頃だけど、一〇〇〇号記念号を出した。及川さん、小紋さんが中心になっていて、九九九号、一〇〇〇号、一〇〇一号の三冊続けて記念号を出したが、すごく大変だった。まだ編集委員しかいなくて、石川一成さん、保坂耕人さん、今泉進さんとかが編集委員でした。そのなかで及川さんや小紋さんがすごく苦労をしていた。

僕らは早稲田の学生だったので、「お前、手伝に来い」と言われて、手伝いに来たりしたんだけど、そのときに小紋さんが「この記念号を出すのは大変だった。毎月、こういう雑誌を出していくには編集実務という役割を作ったほうがいい」というので、小紋さんは編集委員でありながら、編集実務のチーフになり、村山豊さんという「短歌新聞社」にいた、校正とか編集のプロの人、この人も亡くなったけれど、それから、『解体』という歌集を出した勝部祐子さん、入江隆司さん、それから黒岩と守山伊知郎という早稲田短歌会にいたヤツ、その六人で編集実務を作った。一〇〇〇号記念の会を帝国ホテルでやったとき、「できたてのほやほやですけど」と言って、僕らは壇上にあげられて、「これから編集実務という

役割でやっていきますから、皆さん、よろしく」と紹介され、拍手を受けたりしたんだが、その編集実務を小紋さんが作って、それが今の編集部の地盤になったというか。

幸綱　「心の花」の表紙もそうだし、いろいろなパターンもそのときに作った。だから、小紋君の大きな実績の一つは、「心の花」の作品とかレイアウトとか表紙の形とか、それがちょうど一〇〇〇号前後にできるんだよね。

加古　一〇〇〇号のころの表紙は小紋さんの装幀でしたね。

奥田　一〇〇〇号記念のときは幸綱先生が

四十三歳、普樹さんが三十八歳、小紋さんが三十五歳、黒岩さんや谷岡さんが二十四歳。編集委員の年齢的なバランスがとてもいいんですね。創刊一〇〇年記念号のときは、小紋さんと黒岩さんが中心になって、お休み返上で編集に当たっています。いま一五〇〇号記念号を作っているところなので、編集部の体制を調べ直しました。

黒岩　小紋さんの一番大きな役割はそれだった。若者が結構、小紋さんにお世話になったというか。

幸綱　そう。小紋君はよく、若い奴を家に泊まらせたりしてた。影響力が強かったな。

高山　僕とか谷岡がそうでした。とにかく、ああいう無頼な雰囲気がカッコイイと思ったんだよ、若いときは。それで、小紋さんの御蔭もあり僕もすっかりアル中になってしまったんだけど。

奥田　飲みに行くと、次の日もまた始まるでしょう。

高山　三日くらい続くことがしょっちゅうでした。本当に「無頼の人」だよね。

幸綱　うん。だから、普通の会社では勤まらない。雁書館だから何とかやっていけたんだと思う。

高山　それから小紋さんが喜びそうなことを言うと、結構、女性にはもてた。

奥田　母性本能をくすぐる、危なっかしいところがあった？

高山　年をとってからも結構、可愛いというか憎めない感じがあって。

奥田　谷岡さんがよく言ってますけど、酔っぱらって喧嘩をするとき、レンガを持って、しかも新宿のヤクザとか、ケンカしちゃいけない人とケンカをしてたとか。あれは作り話ですか？

高山　作り話じゃないんだけど、かなり盛っている部分がある（笑）。

黒岩　ビール瓶で殴られそうになったことがある。

高山　でも、本当に殴るほどの根性はない。そこが、ある意味、ちょっと可愛い。

奥田　晋樹さんに殴りかかっているところを何回も見ましたよ。

高山　殴りかかるであって本気で殴ってはいないような、どこか節度があってせいぜい猫パンチでしょ。

黒岩　中上健次と一緒の時。

幸綱　あ、中上君の時、居たんだっけ？

黒岩　ええ。で、及川さんと小紋さんが殴り合いになったりして…。

幸綱　中上と俺は結構、仲がよかった。最後に会ったとき、「やあ」なんてやってたら、その間に、中上君に山下雅人が飛びついていった。

黒岩　中上健次さんに突っかかっていっ

て、バシーッとパンチを食らったりして。その横で及川さんと小紋さんが揉めている。

高山　あの時、かなり盛り上がっていたけど、先生は「また、バカなことをやってる」っていう感じで平然とされていたような。

黒岩　先生が「まあ、まあ、まあ。中上君、悪かったねえ。こっちで一緒に飲もうよ」と言われて。

高山　あれだけ大騒ぎをしたのに、何事もなかったように。

黒岩　その時、幸綱先生から「じゃ、黒岩、司会をしろ」と言われて…、中上さんがいるところでどんな司会をすればいいのかという感じだったけど、結構、それ、いい思い出でさ。ゴールデン街で。

幸綱　ゴールデン街も雰囲気があったね。ああいうのは面白かったんだね。

高山　日常茶飯事にそういうことがあって、日々何事もなかったかのように……。

幸綱　はい、先に行きましょう（笑）。

▽小紋さんと辰巳さんの結婚

加古　このころじゃないですか、小紋さんが辰巳泰子さんと結婚されたのは。少し先ですが「心の花」九二年三月号の編集後記に、先生が「小紋君に男の子が誕生。私としても感慨深い」と書かれています。

幸綱　あ、小紋君の結婚の問題があるね。結婚式をやったんだっけ？　僕はよく覚えてないんだけど。

黒岩　お祝いの会を神保町でやったよ。

高山　そう。僕も行ったけど世界飯店でした。

加古　同じ後記に「奥さんの泰子さんは、彼女が十五、六歳の折に歌を頼んだ方でもある」とあります。少女時代の彼女に原稿を頼んだことがあったんですか。

幸綱　うーん、よくわからない（笑）。

奥田　ライトヴァースが出てきたころ、辰巳さんだけものすごく暗かった。特殊な存在でしたね。

加古　先生の編集で九四年に大修館書店から出た『日本歌語事典』という分厚い事典がありますが、そこに歌が収録された中で一番若いのが辰巳さんでした。

幸綱　そうか、忘れてた。やはり期待される一人だったんだね。そうか。そういう人だとは知らなかったんだと思うが。

高山　なぜ知り合ったかという馴れ初めをいうと、黒岩や谷岡の関係からだったと思います。要するに二人を取り次いだのが二人だったとぼくは思っているんだけど。

黒岩　最初はな。

高山　それからしばらくして小紋さんはデートをするとかで「明後日、来るんだよ!!」と、

ものすごく喜んでいたのを覚えています。

黒岩　ちょうど彼女が大阪から東京に出て来るときで、アパートを小紋さんが世話したりして。

高山　最初に住んでいたのは北区王子で、小紋さんと結婚するので多摩センターに引っ越すとき、僕は荷物運びの運転手で手伝いに行った。

幸綱　小紋君、わりと大柄な、派手な人が好きだった。辰巳さんも大柄だよね。そう

いうところが気に入ったんだろうなあと俺は思ったけどね。

奥田　ある危険さ、危なさが似てますね。

▽生きているうちに会わせてあげたかった

高山　結局、別れてしまったけど、最初は喧嘩しつつも結構、仲が良かった。

奥田　辰巳さんは今でも小紋さんのことを大事にされてますね。

高山　でも、なんで別れちゃったのか……。

幸綱　小紋君の気持としては、別れちゃって、後、子どもがずいぶん気に入ってたよね。最後の歌集も子どもがいっぱい出て来るし、子どもを歌った歌でいい作がたくさんある。

黒岩　とてもいいですね。

幸綱　小紋君の一生で、結婚はずいぶん大きかったと思う。

高山　別れた後、急にしょんぼりになっちゃって、僕に言ったのは「最初から一人ならまだ耐えられるけど、二人になってからの一人は本当に淋しい」と。

黒岩　しかも、子どもさんと会えなくなっちゃったから。

高山　辰巳さんはなぜか知らないけれど、子どもに会わせないから、裁判沙汰になっちゃった。結局、会えたのか、会えなかったのか。

黒岩　会えなかったんじゃない？　最後に、小紋さんが亡くなったとき、小紋さんは息子に自分の葬式に参列してほしいだろうというので、谷岡が話をつけて、辰巳さんにも了解をもらって、息子さんが小紋さんの遺影を持って歩く、みたいな、最後はそういう結末で、非常に良かった。

幸綱　ま、いい話だね。

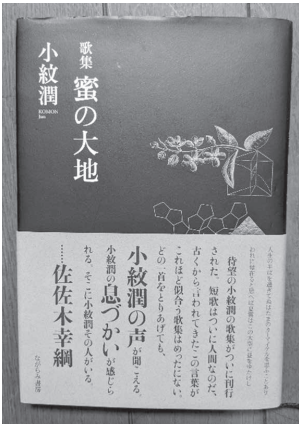
高山　そこは美談ではあるけれど、出来れば生きているうちに会わせてあげたかったし、そういうことを辰巳さんに言ったら、すごく怒られた。事情を知らない者がとやかく言うのはよくないかもしれないけど、小紋さんの気持ちを考えると。小紋さんには純粋な愛情があって、本当に子どもが好きだった。

奥田　小紋さんの歌集『蜜の大地』はどういう経緯で出版されたんですか？

幸綱　早く用意をはじめたんだけど、三、四年もたもたしていた。そこで、俺が太宰府に行ったついでに、俺と大口玲子が長崎まで行って、小紋君を呼び出して、駅前の料理屋さんで話をした。その頃にはもう、かなり弱っていたんだけどね。二時間ぐらい酒を飲んで、料理を食って、大口が「わたしがまとめますから」って。

黒岩　あの歌集が出てよかったですよね。

高山　もう一つ大事な話は、あの歌集は佐佐木先生がお金を出してくださったからで



きたってことで、それを小紋さん、感謝してた。亡くなるちょっと前に小紋さんと会ったとき、「俺は幸綱さんのお蔭で、ほんとうに幸せだった」って、ものすごく感謝してました。

幸綱　それより、大口玲子ががんばってくれたんだよ。大口、小紋というのは信頼関係があってね。それと三年ぐらいかけて、小紋君はずいぶん歌を直した。初出とは歌がかなり違う。未発表の歌もかなり多い。

奥田　長崎の古川典子さんも親身になってお世話をされていらっしゃった。

幸綱　うん、馬場昭徳君もね。谷岡や大口や、古川さん、馬場君、みんなが一生懸命やってくれて、最後はほんとうにいい歌集になったね。結局は、小紋君の人徳だね。

高山　大口さんが頑張ってくださった、これは知らない人もいるから、この場を借りてぜひ言っておきたいですね。

奥田　小紋さん、誰にも面倒見の良い方でしたからね。最期はいろんな方がお世話されたんですね。

▽レールは敷くが表に出ない小紋さん

加古　面倒見の良さということでいうと、「佐佐木幸綱を囲み、語り、飲む会」は小紋さんがプロデューサーですね。

幸綱　ちょうどあの時期の大きなイベントだった。あの会は小紋君が企画・運営してくれて、僕は何もしなかったんだろうと思います。当時、僕が付き合っていた文学関係の人たち、特に早稲田の先生たちが全面的に出てきてくれて、大きな会になりました。

黒岩　紅野敏郎先生とか、竹盛天雄先生も見えたからね。

森部　西鶴研究の暉峻康隆先生。

黒岩　そうだ、そうだ。

幸綱　もちろん、大岡信さん、金子兜太さんとか、早稲田以外、歌人以外の人もいろいろ出て来てくれました。結構、大きな会になって、馬場あき子さんが司会をしてくれたのかな。

加古　司会は、伊藤一彦さんと俵万智さん。馬場さんが最初に挨拶をされた。

黒岩　次が藤平春男先生。

加古　馬場さんがカツ丼の話をするんです。朝日歌壇の選歌の日に用事があって行けなかったとき、近藤芳美さんと幸綱先生が自分には内緒でカツ丼を食いに行った、二人で食べて「やっぱり食べものはカツ丼が一番だ」と盛り上がったって（笑）。

森部　会場はどこでしたか。

黒岩　アルカディア市ヶ谷です。その後、居酒屋に行って。

幸綱　いろいろな賞をもらって、御祝いの会をやってもらったけど、小紋君企画のこの会がいちばん大きな会だったと思う。

黒岩　小紋さんを語るとすると、プロデューサーとして仕切る。お店を決めたり、誰にスピーチさせるか、台本みたいなものを全部、決めるんだけれど、自分は絶対に表に出ない。だから、二次会もどこどこの居酒屋を取っていて、「二次会は黒岩が司会をやれ。早稲田の先生がいっぱい来るから、お前は先生を知ってるだろう」ということで、いろいろなレールは敷くんだけれど、自分は決して表に出ないというところが不思議な人だったね。

高山　確かに裏方で、筋書きを描いて「お前はこうしろ、ああしろ」と指示をするまとめ役をしていたし、周囲の人にもそういう役割の人と思われていた。

黒岩　そういう意味では、いろいろな歌集のプロデュースもしたわけで。

幸綱　表に出てちやほやされるのよりは、年表を作るとか、ベーシックな企画をする、みたいなのが好きな人だったね。

加古　「囲み、語り、飲む会」は乾杯が近藤芳美さんで、樽酒はかつて乃木希典将軍が愛飲したという、栃木の「藤の盛」。アトラクションは千葉勝弘という有名な津軽三味線の奏者でした。こういうのも小紋さんのアレンジだったんでしょうね。

幸綱　今言われた、「藤の盛」という酒は、僕のファンの人が提供してくれた。「藤の盛」は酒好きの乃木大将が若い頃その家に入り浸っていた酒造所で、大正・昭和前期は乃木大将の指示で陸軍の御用酒造所となって羽振りがよかった、という話だった。そこのご隠居さんが（女性でしたが）俺のファンになってくれていたわけです。わが家にも何度か、お見えになりました。

黒岩　夏の全国大会のとき、樽酒をね。

幸綱　必ず樽酒をくれたね。当時七十歳を超えておられたんだろうと思う。「心の花」にも寄付してくれたり、俺にも小遣いをくれたりしたことがあった。

　話が戻るけれど、小紋君はいろいろ会なども企画してくれた。仕切ることが好きだったんだろうね。

加古　全国大会なんかも仕切った。

黒岩　小紋さんの目配りがすごく効いているのは、例えばその年に歌人協会の会員にだれを選ぶか。推薦が何通か届かないと会員になれないので、「お前はだれだれさんの名前をちゃんと書いて、出すように」とか、裏でいろいろしていた人です。

高山　竹山広さんが長崎から初めてお見えになったとき、小紋さんが全部、面倒を見ていました。空港からタクシーを手配したり。

▽小紋さんのプロデュース

奥田　「佐佐木幸綱を囲み、語り、飲む会」はどういうきっかけで、何のために開催されたのですか。

黒岩　詩歌文学館賞かなあ。

加古　『金色の獅子』のときかな、その後でお祝いということで。

幸綱　とにかくあの会は大がかりだったね。俺の短冊の複製をお土産にしたと思う。

加古　先生は「よそうよ」とおっしゃってたんだけど、「もうこれからあと、自分のことで人が集まるのは葬式の時だけか」と思って、受けることにしたとか（笑）。

幸綱　会場の市ヶ谷の私学会館も、小紋君が決めたと思う。

加古　五月に詩歌文学館賞をとられて、七月の会だから……。

奥田　その祝賀会だ。

黒岩　これは絶対、やりましょうって。

加古　いろいろな人がいろいろな話をして面白いのですが、後から来て挨拶した菱川善夫さんが怒るんです。「冒頭から佐佐木幸綱カツ丼論だとか、これが東京の文化的水準なのかもしれないが、幸綱の今回の全重量を、その程度でまとめあげようっていうのは、ちょっと安直にすぎるんじゃないか」「私は聞きながら内心むらむらしていた」って。

　日本の歌人でノーベル文学賞に値するのは塚本邦雄と佐佐木幸綱じゃないか、とも言っています。

幸綱　菱川さんはわざわざ北海道からこの会に来てくれた。ありがたいことです。

高山　目茶苦茶、盛り上がっている感じがしますね。

黒岩　普通、短歌の会だと短歌の人だけですが、早稲田の先生がいっぱい来られたというのがとてもよくて。

幸綱　当時、暉峻康隆って独特な人気だったね。

森部　「女子大生亡国論」で物議をかもしているのに、教室の最前列は女子学生が鈴なりだって神保五弥先生がやっかんでいました（笑）。

加古　先生が第一部の終わりの挨拶で語ったのは「短歌は名詞ではなくて動詞である」「うたうとは心を走らせることである」ということでした。塚本邦雄を意識した発言です。長い、大きな短歌の歴史の中で、自分が三十年間やって来たのはそのことだ、形容詞の歌を作るのは割と楽で、もう疲れてきてそれでもいいと思うこともあるが、歌数は減っても動詞としての短歌を作れればうれしいと思っていると。

幸綱　偉そうなことを言うと、だれも塚本

邦雄の欠点が言えなかった、だから、「塚本邦雄は動いてない。つまり、動詞じゃなく、塚本邦雄短歌は名詞だ。名詞としては究極まで行っているだろうが、ポエムは動詞じゃないか」というのが、当時の考えだった、と思う。

▽信綱の弟子だった前川佐美雄さん

高山　次は前川佐美雄さんのことです。

加古　会の五日後の七月十五日、前川佐美雄が八十七歳で亡くなります。

幸綱　僕個人にとって、前川佐美雄さんは大変大きな先輩です。信綱の弟子で、何人か、まだ生きておられた方がいるけれども、直接に何十回も話をしたり影響を受けたりしたのは前川さんだね。僕は高校生くらいのときに初めて、独り旅をするようになった。大学で『万葉集』を勉強したものだから、奈良に行かねばということで何度も奈良へ出かけた。当時は金がなかったから、夜行バスで関西まで行って、一日か二日、奈良の安宿に泊まって、奈良を歩いて帰って来るというのを何度かやった。

　そんなときに、前川さんに連絡をすると、「じゃ、ご馳走してやろう」ということで、何度か飲ませてもらってご馳走になった。あと、「来ないか」というので、お宅に伺ったこともありました。

　前川さんの話を聞いて、当然、前川さんの作品を読んで、かなり影響を受けた。好んで影響を受けた、と言っていいと思う。

　今でも覚えているが、本当に古ーい、昔の、奈良の、連子窓のある家だったね。

　奈良ホテルという有名なホテルのレストランで飲ませてもらったり。大阪の河豚料理屋でご馳走になったこともあったな。外野から信綱の話を聞いたのは前川さんからだった。俺はずいぶん前川さんの影響を受けていると思う。

高山　そのとき、前川さんとどのようなお話をされましたか。

幸綱　前川さんは関西の金持ちにいっぱい友だちがいて、料亭なんか、よく知ってるわけ。独特な社交術みたいなのがあってね、不思議な人だったなあ。

黒岩　信綱先生が、幸綱先生が歌をやっているということに関して、「幸綱の歌はどうだろう」と前川さんに尋ねたと聞きましたが、先生はどなたから聞かれたんですか。信綱先生から聞かれたんですか。

幸綱　だれだったか、忘れたなあ。

黒岩　それは有名な話ですよね。

幸綱　うんと褒めてくれたらしい。「心の花」の先輩で、川田順、五島美代子、茂はじめ何人か、近代短歌史に出てくる先輩がおられて、その中で前川さんに一番多くお目にかかっていると思う。

▽一緒に風呂に入った人

高山　前川さんはものすごく頭のいい人というイメージを抱いているのですが……。

幸綱　頭がいいというより、するどいという感じかなあ。一九九〇年七月十五日に亡くなって、東京、芝の増上寺でお葬式があって、僕はそこに伺って、弔辞を読んだ。初めてじゃないかな、長い弔辞を書いた。それは「心の花」に載ってます。黒い服を着て、お寺で……、当時のお寺だから、冷房設備は全然なかったんだと思う。ものすごく暑かったことを思い出すね。歌壇の先輩の葬儀で、初めて弔辞を読んだ。

加古　そのときの先生の弔辞で、前川さんとのおもしろいやり取りが紹介されています。「前川さん、動物ではなにがお好きです」と先生が尋ねると、「そりゃ、決まってますがな、断然、麒麟でっせ。高貴ですな。すっくと首を立てて、すいすいと歩いてく姿なんか、ライオンなど足もとへも寄れまへんで。よろしおまんな……」(笑)。

「昆虫なら」との質問には「カマキリ！あの三角の頭、孤独で、何とも言へまへんな。猫でも、人間でも、きっと睨みつけて、一歩も引きまへんで」と(笑)。

奥田　前川さんもちょっとカマキリみたいなところがありませんか(笑)。昆虫っぽいところがありますよ。

幸綱　今、思い出したけど、一緒に風呂に入ったことを覚えているのは前川さんだ。角川書店の、伊豆山名月歌会だったかなあ熱海で会があって、そのとき前川さんと一緒に風呂へ入ったことを覚えている。本当に痩せてる人でさ(笑)。そういうふうなイベントで一緒のところに行って、一緒に風呂に入った歌人が、男の人で何人かいるわけだ。岡野弘彦さんとか。前川さんはよく覚えている(笑)。どうでもいい話だけど、「一緒に風呂に入った」というのは面白いだろ。

黒岩　僕は、ある会で塚本さんと連れションをした(笑)。タイミングが二回、一緒だったので、塚本さんから「あなたとはタイミングが同じですなあ」とか言われて、それがすごく印象に残ってる(笑)。でも、そういう思い出ってあるじゃないか。一回だったら、たまたまなんだけど、二回、一緒になったので…。(笑)

奥田　石樽千亦(いしくれちまた)の追悼号だったでしょうか、「心の花」のバックナンバーで、前川佐美雄が「石樽千亦という人は若山牧水に匹敵する大歌人だ。それをみんなわかってない」ということを書いてました。石樽千亦と前川佐美雄はどういう関係なんですか。

幸綱　前川さんにとって、非常に若いころに出会った歌壇人の最初じゃないのかな。僕はよく知らないが、石樽千亦という人は本当に包容力のある不思議な人だったみたいだね。

奥田　脈々と継がれているものがあるような感じがしますね。

▽小紋さんの部屋

幸綱　前半の最後に、もう少し小紋君の話をしようか。

黒岩　あとは雁書館の思い出だね。神保町の狭いビルの二階だか三階だかにあって、階段を上って行くんだけど、途中からすごく煙草臭くなって、部屋へはいると冨士田さんと小紋さんがパカパカ煙草を吸ってたから、雁書館から届く歌集とかって、封を切ったら煙草臭い(笑)。

高山　小紋さんは家の掃除をすることがなかったみたいで、壁と床にびっしりと埃がこびりついていて……。

黒岩　でも、トイレはきれいだったよ、お客さんが来るからというので。

高山　小紋さんは部屋に女の子を呼んで宴会をするのが好きで、一年に一回ぐらいの感じで計画する。

奥田　大口玲子さんと小川真理子さんとか。

高山　それで谷岡や僕が前日から泊まり込んで掃除をして、小紋さんの指示で料理を

作ったり準備をするわけ。雑巾がけから始まってものすごく一生懸命掃除をした。一年間、掃除を一回もしたことがない部屋だから（笑）。

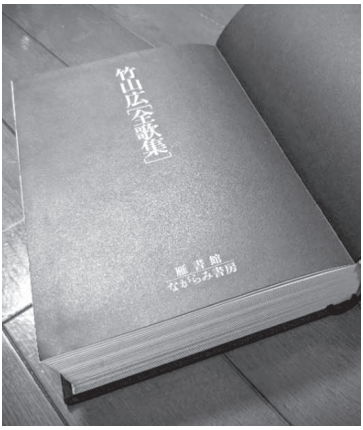
黒岩　俵万智だって、角川短歌賞を取った時、まず最初に多摩センターの小紋さんのところに報告に行ったんだもの。

幸綱　煙草で天井が黄色くなっている。天井が全部染まってしまうんだね。俺の部屋もそうだった。煙草を吸っていたころの本棚の本の背表紙は茶色だった。

奥田　小紋さんの仕事としては『竹山広全歌集』や『昭和万葉集』も大きいですね。

黒岩　講談社で『昭和万葉集』のアルバイトをやったんだね。

奥田　すごい仕事です。



高山　小紋さんが編集者として一番輝いていた時期が『昭和万葉集』だと思います。まだ、出版社が景気が良かった時代で、本人の話ではハイヤーも乗り放題だったとか、かなり自慢げに話をされていました。

奥田　『竹山広全歌集』も小紋さんが作った歌集ですね。原爆は、小紋さん自身のテーマでもあったんじゃないでしょうか。浦上天主堂の裏に実家があったそうです。

黒岩　前の「ほろ酔いインタビュー」でも話したことがあるが、広島で全国大会をやった時の二次会かなんかで、だれか男性の部屋に集まって話しているとき、そこに竹山さんがいて、西田郁人さんがいて、小紋さんがいてというところで、竹山さんは原爆を詠む。その当時、西田さんはまだ全然原爆は詠まない、ということで、なぜ、詠むんですか、なぜ詠まないんですか、みたいな話になったとき、竹山さんは「自分は詠みたくて詠んでいるわけではなくて…。やはり詠み始めるまでは何十年とかかったんだが、今は覚悟をもって詠んでいる」みたいな。

　それに対して西田さんは「竹山さんの今の言葉をもらうと、覚悟をもって詠まないんだ」みたいなことを言われて、けっこうみんなシーンとして聞いているという場面があったんだけれど。

幸綱　竹山さんが被爆後、十年くらい、原爆の歌を詠まなかったことがある。西田君とか小紋君とか、かなりずーっと原爆を引きずったよね。

高山　小紋さんは竹山さんには特別な思いで接していたように見えました。少なくとも竹山さんという存在が小紋さんにとって大切だったことは間違いないと思います。では、前半はひとまずここで終わります。

小紋潤さん